

令和4年8月11日（木・祝）

# 戦時中の体験を聞く会

共催：東松山市

語り手 おかべ ひろあき  
岡部 博明 さん

演題：『御霊の父と共に』～育ての家族への感謝と慰霊巡拝・遺骨収集現地調査～

8月11日（木・祝）に東松山市との共催事業である「戦時中の体験を聞く会」を開催しました。語り手に桶川市在住の岡部博明さんをお招きし、『御霊の父と共に』～育ての家族への感謝と慰霊巡拝・遺骨収集現地調査～という演題で、川越女子高校放送部の皆さんによるインタビュー形式で実施しました。

## 【内容】

－岡部さんの生い立ちを教えてください。

昭和19年2月に東京で生まれましたが、父は出征中で、母が出産の18日後に亡くなったため、父の実家である長野の長兄夫妻に預けられました。昭和20年5月に父の死亡通知が届いたため、長兄夫妻の子供と同様に育てられました。

－戦争で父を亡くしたことで大変だったことはありますか。

中学2年生のとき、担任から封をした松本の護国神社への参拝に関する通知が渡されました。中身を確認した育ての父から「お前の父親は松本の護国神社に祀られている。是非、行って来なさい。」と、初めて実の父とのことを聞きました。でも、その後はそれまで通り家族として扱ってくれました。本当に素晴らしい家族でした。ただ、戦争遺児への差別意識がある世の中だったため、就職では悔しい思いをし、戦争を心から憎みました。結婚にも不安を抱えていましたが、自分の境遇を理解してくれた伴侶と出会え、家族も心から祝福してくれました。

－どうして遺骨収集を始めるようになったのですか。

定年後は常々父が戦死した東部ニューギニアに供養に行きたいと思っていたところ、桶川の広報に慰霊巡拝の記事があり申し込みました。平成27年10月7日、戦没地で父の供養を行い、御霊の父と巡り逢えました。その後、もし父が帰還していれば、戦友の遺骨を収集して供養したのではと思い、父に代わって遺骨収集をしようと考えました。「日本遺族通信」に遺骨収集事業の参加者申込があり申し込んだところ、どこに遺骨があるかを調べる「遺骨収集現地調査」への参加を依頼されました。

－遺骨収集現地調査とはどのように行われているのですか。

1回の調査期間は2週間で、電気、ガスなどはなく、トイレは外に掘った穴で済ませるといった場合もありますが、兵隊さん達が飢餓や病で斃れた環境を思うと不自由は感じません。現地の人案内で遺骨が見つかることもありますが、当時のことを知っている人がおらず、空振りに終わることもありました。

－現地の様子や現地の方々の対応はどうでしたか。

現地の方は友好的です。日本兵は現地の方と友好関係を築き、子孫も日本に好感を持っているようです。しかし、ある村で不愉快だから来ないでくれと言われたことがあります。平和に暮らしているところに日本兵がやってきて、この国をめちゃくちゃにしたうえ、残された日本兵の遺骨の上で生活をしている気持ちが分かるかと言われました。私は遺骨を収集したあとの、綺麗になった土地で作物や家をつくって欲しい、未だここに眠っている父達の遺骨を収容して日本の故郷の土を踏んでもらいたいのです、と伝えたところ、理解してもらえました。

－遺骨収集の課題を教えてください。



新型コロナの影響もあり、東部ニューギニアでの現地調査も令和元年12月以降は実施されていません。平成28年に戦没者の遺骨収集に関する法律ができ、国の責務で遺骨収集が行われていますが、期限が令和6年度までなので延長されることを願っています。また、現地調査には日本遺族会から必ず1名が派遣されることになっていますが、高齢化が進んでいます。

－平和に対する思いを教えてください。

戦争は悲しみだけを残します。若い人には平和の尊さ、戦争の虚しさを真剣に考えていただき、次の世代への教訓として欲しいのです。戦争は絶対にダメです。私は小さい頃から争いごとが嫌でした。それは何故か？父親が戦争で亡くなったからです。

(講演の内容は「埼玉県平和資料館だより」から転載しました。)